特集

みんなの思いで続く まさき町夏祭り

皆さん、8月5日に行われた「まさき町夏祭り」は楽しみましたか。
今回は、ただ今年のお祭りを振り返るだけでなく、
昔から多くの人に親しまれてきた様子も一緒に振り返っていきます。

義農公園 1982 昭和57年

▲昭和57年、祭りがスタート。

▲昭和61年ころまで行われていた「綱引き」。男性も女性も気合十分です。

▼小学生による「トランペット鼓隊」。義農通りなどをパレード。

◀義農通りの様子。会場が松前公園に移されるまで、笹飾りのコンテストが行われ、会場を彩っていました。

▼昭和60年、まさき音頭を初めて踊りました。

35年前から続くお祭り

「松前夏祭り」という名称で、町全体の夏祭りが開催されたのは、35年前の昭和57年です（はんぎり競漕などの催しは、昭和48年から「港祭り」で行われていました）。

開始当時は、現在の塩屋海岸や松前公園ではなく義農公園で祭りが催されていました。上の写真は、祭りの変遷を紹介したものです。これらを見ると、これまで多様な催しが行われてきたことが分かります。

今回はその中でも、今やメインイベントとなっている、はんぎり競漕「H（はんぎり）—1グランプリ」と「まさき音頭」に焦点を当て、「楽しむ」という要素だけではない、夏祭りが紡いできたものについて考えていきます。

まさき町夏祭りの歴史

History

- 昭和57年（1982）「松前夏祭り」として開始（義農公園）
- 昭和60年（1985）「まさき音頭」登場。義農プールで「はんぎり競漕」を実施
- 平成11年（1999）会場が義農公園から松前公園・松前中学校（はんぎり競漕）に
- 平成14年（2002）はんぎり競漕の会場が松前中学校から塩屋海岸に
- 平成28年（2016）はんぎり競漕に高校対抗の部「はんぎり甲子園」が誕生

▲お祭りに本物の「おたたさん」が登場（平成2年）。おたたセリ市で魚を販売。

▲義農プールで行われていた「はんぎり競漕」。

松前公園 松前中学校 1999 平成11年

▲松前公園に会場が移行。夜店ににぎわう風景は、今も変わりません（平成11年は、義農公園でも一部イベントを実施）。

▲全国的に渇水となった平成6年、「おたた雨乞い踊り」を踊り、恵みの雨が降ることを願いました。

▲帰りには、鈴虫のおみやげも（平成7年）。

▲はんぎり競漕が塩屋海岸へ。現在の浮き桟橋はありませんでした。

2002 平成14年 松前公園 塩屋海岸

▶祭りが始まった当初から、多くの人に迫力ある演奏を届けている「義農太鼓」。

塩屋海岸の会場から見えるもの

町の伝統をつなぐ「H－1（はんぎり）グランプリ」
高校生が町外へ魅力を発信「はんぎり甲子園」

夏の風物詩「はんぎり」

今や本町の夏の風物詩となっている「H―1グランプリ」。小学生から大人までが、はんぎりと呼ばれる桶に乗り、体の上下運動だけで海上を漕ぎ進み、その速さを競います。

上下運動だけで漕ぎ進むのは全国的に見ても珍しいのですが、「なぜ、はんぎりが松前町で親しまれているのか」ということは知っているでしょうか。

「はんぎり」は江戸時代から

本町では、江戸時代からいわしなどの地引網漁業で「はんぎり」を使用していました。漁師が魚を運搬するため、沖合いに泊まっている船まで漕いで行ったのです。文禄4（1595）年、松前城主の加藤嘉明が領内を巡察したとき、船子がはんぎりに乗る様子を見て「もう一度見たい」と言って競漕させた記録も残っています。

漁獲されたいわしは、煮干し（いりこ）に加工されたほか、魚の行商人「おたたさん」を通じて各地に届けられました。

はんぎりは、本町が今も全国有数の加工生産量を誇る小魚珍味や、本町の歴史を彩るおたたさんを支える道具として、昭和35年ころに船引網漁業に代わるまで、愛用されたのです。

形を変えた「はんぎり」

用途を失ったはんぎりは、風呂の焚物などに利用されましたが、昭和47年、本村地区の蛭子神社の拝殿新築祝賀行事で「はんぎり競漕」として復活します。その後、中断時期もありましたが、現在も競技が続けられています。

町外の人へ魅力を発信
高校対抗「はんぎり甲子園」

現在は、形を変えながらも、昔からなじみのあった道具を使い、多くの人に親しまれる競技となった「H―1グランプリ」。その漕ぎ手は、家族や友人などの影響を受けながら、「みんなで楽しみたい」「また出場したい」などの思いを持って競技に臨んでいます。

また、昨年からは高校生を対象とした「はんぎり甲子園」を実施。県内の高校生の皆さんに、他にはない松前町の魅力を体感してもらうとともに、より多くの人に「はんぎり」や「松前町」を知ってもらうための発信源となって、周囲にその魅力を伝えてもらっています。

町を越えて「はんぎり」の魅力を多くの人へ―。その思いをつないでいくことで、伝統を受け継いでいきます。

1_地引網漁業で使われたはんぎり（左奥）　2_松前内港での競技の様子　3_新しい風を起こす高校生　4_波しぶきをあげて漕ぐ人、それを見守る多くの人。その風景は今も昔も変わらない。

◉はんぎり競漕の結果

子ども男子の部
1位　相原大成（岡田小）
2位　河野晏士（岡田小）
3位　檜垣光（岡田小）

子ども女子の部
1位　合田光結（岡田小）
2位　傍土愛菜（岡田小）
3位　大川心暖（北伊予小）

一般男子の部
1位　久保貴章（松前社協）
2位　相原俊二（松前町役場）
3位　福桝正成（松前町役場）

一般女子の部
1位　河内裕里（フリー）
2位　小森谷あや（東レ）
3位　渡辺司（松前町役場）

団体戦
1位　フクマスとゆかいな仲間たちB
2位　東レC
3位　フクマスとゆかいな仲間たちA

はんぎり甲子園（高校対抗）
1位　松山中央高等学校A
2位　松山工業高等学校B
3位　松山東高等学校A

子どもの部　優勝
相原大成 くん

お父さんが毎年はんぎり競漕に出ているので、「前に漕いだらいい」とコツを聞きました。決勝はスリップもせず、加速できました。昔、（内港で）はんぎりを漕いでいた漁師さんの姿はかっこいいです。また出場したいです。

一般女子の部　優勝
河内裕里 さん
窪田珠奈 さん

（河内さん）はんぎり競漕は楽しいです。町外の人と楽しみながら来年も出場して、3連覇を目指したいです。　（窪田さん）昔やったことがあり、久しぶりに漕ぎました。町外の人とチームを組みましたが、ゴールできなくて…。また出場して楽しみたいです。

はんぎり甲子園優勝　松山中央高等学校
大西涼雅 さん　村上詩郎 さん
白石裕哉 さん　三好隆徳 さん

中央高校にとっての初優勝を飾ることができて、とてもうれしいです。小学校のころからの仲のいいメンバーでチームを組んで、一生懸命練習してきたかいがありました。大人になったときに、一般の部の団体戦で帰ってこられたらいいなと思います。

松前公園の会場から見えるもの

誰もが歌って踊れる「まさき音頭」

会場は松前公園へ

夕方、会場は塩屋海岸から松前公園に移されます。町内の小学生が伝統芸能や金管バンドを披露した「子どもフェスタ」、大人も子どもも声を上げて楽しんだ「餅まき」、そして、フィナーレの夜空を彩る「花火」の前に行われるメインイベントが「まさき音頭」です。

町民の手で作られた「まさき音頭」

皆さんは、どのようにまさき音頭が作られたのか知っていますか。2ページで紹介しましたが、まさき音頭が作られたのは、昭和60年。この年は、松前町町制施行30周年となる節目の年でした。

「町の歴史、自然、産業、文化などが分かるもので、親しみやすく、また、いつまでも心に残る歌を町民みんなでつくっていきたい」

この思いから、歌詞を公募し、音楽や振り付けを加えてできたものが「まさき音頭」です。そのため、歌詞を見ると、「義農祭」「お瀧姫」「夫婦橋」「ひまわり」など、松前町の皆さんなら分かる言葉がたくさん出てきます。

まさき音頭で町づくり

開始当初は、10連にも満たなかった連が、年数を経て多くの人に親しまれるようになり、今年は23連となりました。参加者も子どもから大人まで、また、町外の人も増えています。右の写真を見ると分かる、皆さんが笑顔で心を一つにして踊っている姿―。まさに町民の皆さんが作った歌詞のとおりとなっているのではないでしょうか。

「老いも若きも　太鼓に合わせ　まさき音頭で　町づくり」

♪まさき音頭

ハアー
瀬戸の春風　麦田に吹けばヨ
義農祭の　人の波
忘れられない　われらが偉人
偲ぶ心に　笛が鳴る
ホラ　みんな踊ろよ
輪になって　なもしまさきは
よいところ
ハアー
お瀧姫さま　前帯しめてヨ
おんな気質の　浜の町
おたた姿の　可愛いあの娘
会えて嬉しい　夫婦橋
（※）繰り返し
ハアー
明日の幸せ　夢みて語るヨ
ここは二人の　出合橋
踊る若鮎　重信川に
恵み豊かな　米どころ
（※）繰り返し
ハアー
松前・北伊予・岡田が寄ってヨ
咲いたひまわり　愛の花
老いも若きも　太鼓に合わせ
まさき音頭で町づくり
（※）繰り返し

◉まさき音頭の結果

優勝	伊予民踊研究会
準優勝	大間ありあけ会
3位	婦人会＆ボラ連
殊勲賞	社協連
敢闘賞	松前小学校ＰＴＡ連
仮装賞	
1位	大間ありあけ会
2位	社協連
3位	北伊予小学校ＰＴＡ連
MDV賞	八木代志子（婦人会＆ボラ連）

夏祭り実行委員会委員
婦人会＆ボラ連
丸田信子さん

1回目から、今までずっとまさき音頭に出場しています。昔は、おそろいの浴衣を着て踊っていました。義農公園や夫婦橋などをパレードして―。商店街を通るときは、道沿いに住んでいる人が応援して声を掛けてくれたことが印象に残っています。

松前公園に移ってからは、3校区で一つになり盛り上がっているように感じます。踊っていると心が一つになる、まさき音頭は大好きです。夏祭りはこれがないと始まりませんね。

まさき音頭を踊りながら、商店街をパレードしている様子（昭和60年代）。商店街沿いには多くの人が見物に訪れ、にぎわっていた。

「楽しみたい」という思いが
祭りをより魅力的に、誇れるものにする―。

みんなの思いで「続く」、「つくる」夏祭り

昭和57年から、さまざまな催しが行われてきた夏祭り。そこに共通しているのは、「みんなで祭りを楽しみたい」という思いです。特に、その思いを持つ人が多くなった催しが、現在のメインイベントである「H―1グランプリ」と「まさき音頭」だと言えます。年を重ねるにつれ、町内だけでなく、町外の人ともその思いを共有して行われるようになり―。夏祭りに欠かせない行事となりました。この積み重ねが、祭りをより魅力的に続けていく原動力となるのです。

また、誰かが楽しんだり頑張ったりしている姿に影響を受け、自分もやりたいと思って参加し始めること―。これを繰り返していくことで、気付かないうちに伝統のバトンを引き継ぎ、「松前町にしかない、誇れるもの」を築いていくこととなるのではないでしょうか。

また、1年後―。より多くの人で夏祭りを楽しみ、町を元気にしていきましょう。